

# 生存科学研究 ニュース

VOL. 7. NO. 5.

1992. 9. 10. 発行

発行：財団法人 生存科学研究所

〒104 東京都中央区銀座4-5-1

聖書館ビル 303

電話 03-3563-3518

## 第2回 医薬問題研究会 シミュレーション2010年

7月6日(月)午後2時より、「2010年の医療—その中の医薬の位置付け」をメインテーマとする第2回医薬問題研究会が開催され、経済の長期見通しを把握するため、阪大名誉教授、筑井甚吉亜細亜大学教授(生存研副理事長)から、氏が自ら作成に参加した経済企画庁の「シミュレーション2010年」について説明を聞いた。

氏は先ず、シミュレーションに際し重要なことは、将来の技術の予測であり、専門家から直接聞いて判断することであると強調。

次いで、産業連関分析を組み込んだターンパイク・モデルを用いて、国際収支黒字額、石油価格上昇率、製造業の輸出伸び率、農林水産業の輸入依存度等を変えた5つのケースについてシミュレーションを行って得た、2010年における内需・貿易収支・GDP・要素所得・経常余剰・GNP等の実質伸び率や総投資・総貯蓄・貿易収支等の対名目GNP比、さらに名目産業構成比について、それぞれの場合の予測値を紹介した。

討議では、各予測値に関連した質疑が活発に行われたが、特に名目産業構成比の中の「公務・医療等」について議論が集中し、より詳細な構成区分での研究が要望された。

## 第2回東西の健康観・医・薬研究会 パラダイム論の系譜

7月10日(金)午後1時半より、平成4年度第2回研究会が開催され、神奈川大学教授中山茂委員が上記の演題で発表した。

氏は、60年代に、同じハーバード大学で研究室を共にされパラダイム論を提唱したクーンとの交流を交えながら、パラダイムの定義、背景、批判、さらにクーンによるパラダイムの放棄に至る経過について述べた。

パラダイム論は特に社会科学の領域で広く受け入れられ用いられたが、その背景には60年代後半からの学問の問い直し、反体制運動などの社会思想がある。物理学ではパラダイム論は当然のことと受け取られた。医学領域ではパラダイムが「安定していない」精神医学や心理学の分野で良く用いられている。

パラダイムは通常科学とセットとして考えるべきであり、伝統文化や伝統医学をパラダイムを用いて整理することは可能ではあるが、社会的関心を欠いた通俗的なパラダイム論は好ましくないことも指摘された。

【お詫び】：前号のニュースの本研究会「東西の医薬に対する薬理学的研究方法の違い」の記事中、伝統薬の試験には伝統的形態で、と報じたのはニュース編集者の間違いでした。お詫び申し上げます。(編集子)

第2回 生死と生存研究会  
自然と人間

7月12日(日)午後2時より、第2回研究会が開催され、表記のテーマで、花園大学教授、大阪市咲くやこの花館技術顧問の立花吉茂氏が発表した。

氏はまず、ミクロに入った生物学への反省からマクロの世界にフィードバックしなければとして新しく生まれたのが生態学であると説明し、次いで、地域レベルの話として、雨量・湿気が多い東南アジア特に日本の生態系の複雑さを述べ、その豊かさを守ることの大切なこと、そのためにも、現在意外なほどに遅れている基礎的学問の進歩が重要であることを強調した。

地球レベルの話としては、植物の種類よりトータルな量が問題であるとし、熱帯雨林には、将来人間が使える貴重なものが沢山あること、それが今人口の圧力で破壊されていること、今の科学技術では対応が間に合わないことを指摘し、自然修復の必要を強調した。

最後に医学について、それが生物学を基礎としているにもかかわらず、それと逆行しているのではないか、との疑問を提出した。

生死と生存研究会 現地研究会  
白山那谷寺縁起

7月24日(金)・25日(土)の両日、研究会員が大自然のなかにたたずむ石川県小松市那谷寺を訪れ、那谷寺の木崎住職から、那谷寺と古典的山岳信仰との関係を歴史的に論じた「白山那谷寺縁起」を聞いた後、日本人の自然感、特に山岳信仰における自然と人間との関係や環境問題に対する宗教の役割等を討議した。

「生死と生存」の委員会が8月7日に開催され、バイオサナトロジー学会設立の準備に取り組んでいる。それにむけて10月4日(日)すみだリバーサイドホールで、Dr. エリザベス・キューブラ・ロスの特別講演を行う。詳細は添付別紙を参照されたい。

東北プロジェクト研究  
安家に関する研究会

7月2日(木)午後4時より、研究所会議室において、安家研究の具体的推進にむけて会議が開催された。出席者は財団法人「森とむらの会」専務理事杉本一氏、国学院大学教授、考古学者、縄文文化研究家の小林達雄氏、農林水産省農業研究センター総合研究官小泉浩郎氏、研究所の専務、常務理事。

安家研究には基底的な文化・文明論が必要であり、縄文文化、農業文化、産業社会の文化のそれぞれの良いところを生かして生存のための何かを見い出せないであろうか、との理解で討議を開始した。

環境や国土の保全、農民や山林従事者の保護、農業や林業の保護、農村の機能の掘り起こし、自然の仲間入りをして人間が場を貰うという生き方等について議論が弾んだ。

九州プロジェクト研究  
大分・アルメイダ病院における  
医療の投入産出分析 開始

7月22日(水)・23日(木)の両日、生存研筑井副理事長が、第2回総合解析検討委員会で披露され討議された「医療の投入産出分析」のアイデアを携え大分市医師会立アルメイダ病院を訪問、同病院との共同研究のため松橋病院長(医師会長)、島津副会長、黒木部長等と会談。

同病院の診療ならびに運営の経時的データから、例えば、疾病、その対策と医療費等の動向を予測するような医療の投入産出分析を行うための具体的作業が開始された。

第2回 肝臓解析検討委員会

8月11日(火)午後2時より、生存研会議室において、肝臓医師会病院今院長の出席を得、鈴木委員長他研究所内のメンバーが

参加して第2回委員会が開催された。

今回は、先ず今院長から、肝属医師会ならびに医師会病院の地域医療活動全般の具体的実施状況と病院の詳細な運営状態を聞き、また肝属医師会病院のある大根占町をふくむ4町の社会経済状態、人口の動向、民間ならびに地方自治体の地域振興対策について、さらに病院と住民、行政との対応についての報告を受けた。

その後の討議においては、肝属医師会病院による地域医療活動が定着し、地域住民や地方自治体が医師会病院に高い評価を与えていること、しかし自治体の財政は苦しくその評価に見合う財政協力はむずかしいこと、地域振興への地域民間人の活動も活発だが単発に終わり、成果は必ずしも期待できないことが分かった。それへの対策としては、都市へのアクセスを良くする交通の改善が必要なこと、しかし同時に都会にない僻地の良さを大いに大切に、中途半端な開発を避けること、住民の心のなかの地域への愛着とその環境への誇りを高揚するような、今迄と違うやり方が必要であることが議論された。

日本は官主義のために、例えば国土保全のような一番大切なことが抜けてしまったが、肝属や安家を対象とする住民の生活に基盤をおいた実践的研究により、縄文文化的生活と現代文明社会生活とのバランスを取るような、生存の基本となる大切なものを回復する具体論が得られるのではなかろうかとの期待が持たれる。

東北プロジェクト現地研究会  
第3回安家訪問

旧盆にかかる8月12日(水)・13日(木)の両日、研究所小平専務理事、国学院大学小林達雄教授、農水省森林総合研究所東北支所遠藤氏等が、岩手県岩泉町安家を訪問。国有林に対する国の施策によって影響される安家の森林の状態、住民の生活等について地域の人達と話し合い、これらの問題を含

め、将来の安家のあり方をめぐるこれからの取り組み方を検討した。

平成4年度  
公益信託武見記念生存科学研究基金  
財団法人生存科学研究所  
合同顧問会

7月13日(月)午後2時半より、研究所会議室において平成4年度合同顧問会が開催され、完成したばかりのビデオ『生存』が紹介された後、研究所の基本的方向に関して各顧問から熊谷理事長が御意見を伺った。

ビデオ『生存』は、武見太郎先生の思想と、その深化・展開に取り組む生存科学の研究活動への理解を、映像によるイメージを借りて少しでも容易にしたいと願って作成したものである。映像作成協力者、映像化委員会委員も陪席した。

第5回武見国際シンポジウム  
健康・開発に関わる倫理的諸問題

7月15日(水)～17日(金)の3日にわたり、横浜市のパシフィコ横浜会議センターにおいて、生存科学研究所とハーバード大学公衆衛生大学院武見講座とが2年毎に交互に開催している武見国際シンポジウムの第5回が、「健康・開発に関わる倫理的諸問題」をメインテーマに、かつハーバード大学武見国際保健講座の活動の評価もかねて、生存科学研究所の企画・主催で開催された。

参加者は、生存研関係者、ハーバード大学武見国際保健講座関係者、ゲストスピーカーの他多数の傍聴希望者。特に今回はこれまでの全武見フェローのなかから21人(インド、韓国、スリランカ、台湾、中国、ナイジェリア、日本、ブラジル、フランス、マレーシア、南アフリカの11か国)のフェローが参加。特別講演以外の研究発表15題は、全て招待されたフェローの発表であった。

なおこのシンポジウムでの発表は、研究誌

『生存科学』に逐次掲載される予定なので、詳細はそれに譲り、ここでは全体の概要を紹介するに留める。

\* \* \* \*

第1日午前、熊谷理事長の挨拶の後、武見メモリアル・セッションのL.C.Chen武見プロフェッサーによる「武見哲学と国際保健研究」が講演された。氏は、武見博士の思想の中から生存科学、医療における人間関係、医療資源の開発と配分等の重要な理念を紹介、さらに武見博士の多くの論文を引用しながら、ヒューマニズム、地球規模での視野、世界の平和等をその基底にもつ武見博士の思想を、特に国際保健研究に関連してその意義を強調し、全ての人々が、特に日米が協力してこれを推進する責務があると結んだ。

次いで厚生省田中母子衛生課長（武見フェロー）が、助産婦の教育や制度からみた日本の母子保健のケーススタディー「技術移転の倫理的評価」と題してキーノートアドレスを行った。

第1日午後は、武見フェローにより「文化と倫理」「技術と倫理」に関わる7題の研究発表がさなれ、それをめぐる討論がおこなわれた。

\* \* \* \*

第2日午前、武見メモリアル・セッションとして、まず、武見哲理と生存科学研究について、それを映像化したビデオ『生存』の上映と生存研小平専務理事の説明が行われた。

次いで、日本赤十字血液センター西岡久寿弥顧問が「B型肝炎およびC型肝炎のコントロール：アジアにおける肝細胞癌の予防戦略」と題し、武見博士が音頭を取り、講師も中心的役割を担って参加し推進させ、大きな成果を上げた日本の肝炎対策の全貌と、それを土台に進め得るアジアにおける肝癌予防対策について講演した。

更に、キーノートアドレスとし予定されていたハーバード大学公衆衛生大学院H.V.Fineberg学部長による講演「保健と開発における

倫理的ディレンマ」が行われた。氏は、自由主義、平等主義、功利主義という3つの西欧哲学の原理を紹介、医療の分野におけるそれぞれの原理による矛盾や問題を提示し、その矛盾や問題の解決には公衆衛生や予防等の保健的アプローチが重要であることを強調。また経済的開発にさいして人間の福祉を忘れてはならない、健康と経済とを一体として考えた大きい意味での開発というのが武見博士の思想であると指摘した。

第2日午後は、武見フェローにより「人的資源の開発と倫理」ならびに再び「技術と倫理」に関わる8題の研究発表と討論がなされた。

\* \* \* \*

第3日午前、総合討論に先立ち、Baylor College of Medicine and Rice UniversityのH.T.Engelhardt Jr.教授による講演「Western Bioethics and the Post-Modern World: Applying the Principles of Bioethics after the Collapse of Traditional Values」が行われた。

その後の総合討論では、前記のEngelhardt教授、L.C.Chen教授と天然痘撲滅運動で大きな保健業績を上げられた元熊本国立病院院長蟻田功氏がコメンテーターとなり、参加者全員で討論が行われた。

閉会の辞において、生存研土屋健三郎副理事長は、バイオエシックスとの比較をしながら、生存科学は、生命の連続性、人類を含めた生態系の生存を、未来における価値を基準に、科学・技術の計画により実現することを目指すものであると解説した。

\* \* \* \*

第1日夜には、生存研理事長主催の、第2日夜には同専務理事・H.V.Fineberg学部長共催のレセプションが開催されたが、席上、武見フェローから今回のシンポジウムの成果を喜ぶとともに、武見太郎博士の大きな思想に触れたことへの感激の声が多く聞かれた。

シンポジウム終了後、武見プログラムの日米委員会が開催された。